

教員養成における生活科の内容理解へ向けた実践
— 授業科目「初等生活科教育内容」での「思い出マップ」制作・交流の演習 —

平田 幸男

(至学館大学 健康科学部 こども健康・教育学科)

1. はじめに

児童の学習を支援する上で、教師はその教科目標及び内容をよく理解しておく必要がある。とくに生活科では、具体的な活動や体験を通して資質・能力の育成を図る*。したがって、教職を目指す学生も、教科目標及び内容を単に文言として理解するのではなく、自らの実体験を伴って理解することが望ましい。そこで、愛知教育大学にて筆者が担当する授業科目「初等生活科教育内容」(前期の受講生52名)のシラバスでは、その目標に、「受講者自身が具体的な活動や体験を通して生活科の教育内容の理解を深めるとともに、生活科の授業作りへの関心・意欲を涵養すること」を含めた。

本稿では、生活科の内容理解へ向けた実践として、「思い出マップ」制作・交流の演習について報告する。

2. 実践の内容

2-1. 演習のねらい

本演習は主に、生活科の内容(9)「自己の成長」及び(8)「生活や出来事の伝え合い」に関わるものである。小学校学習指導要領(平成二十九年告示)解説生活編(以下、解説)によると、「自己の成長」の内容は次のとおりである。

自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分のできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるようになるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからの成長の願いをもって、意欲的に生活しようとする。

また、「生活や出来事の伝え合い」の内容は、次のとおりである。

自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。

なお、これらの内容に関わる学習活動の例として、大日本図書による令和2年発行の教科書「たのしいせいかつ 下 一はっけん」(以下、教科書)において、「自分は一はっけん」という学習単元が組まれている。それには、自分の生活や成長の振り返りとして、「自分は一はっけんブック」という成果物にまとめる学習活動が提示されている。

そこで、筆者は「自己の成長」と「生活や出来事の伝え合い」の内容理解へ向けて、「思い出マップ」の制作とそれを用いた学生同士の伝え合いの演習を設定した。学生に示した「思い出マップ」制作・交流のねらいは、以下の3点である。

- ①子ども時代の思い出を振り返ることを通して、自分の生活が地域の様々な人・もの・ことと関わり合っていることを改めて分かるとともに、自分の成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからも意欲的に生活しようとする。
- ②子ども時代の思い出をお互いに伝え合う活動を通して、伝えたいことを選び、伝え合うことのよさや楽しさが分かるとともに、進んで交流しようとする。
- ③地図を作る技術の向上を図る。

この①及び②については、前述の生活科の2つの内容と関連させている。本演習で言う子ども時代とは、概ね小学生時代までである。また、活動や体験を重視する生活科においては、他者と伝え合い交流する活動を大切にする必要がある。したがって、「思

い出マップ」について、単に制作することが目的ではなく、それをもって思い出を伝え合うためとしている。さらに、生活科においては、例えば町探検後の表現活動などでも地図に表すことが多い*。このことから、地図を分かりやすく効果的に作る技術の向上を図るため、③を設定している。

そして、制作の要領は以下の3点である。

- ①画用紙の大きさは自由。
- ②全て手描き。手作り。
- ③子ども時代の自分の生活や成長に関わった地域の人・もの・ことについて、出来事やエピソードを豊かに盛り込む。

①について、基本は8つ切り大である。しかし、載せたい情報の量や地理的な範囲の縮尺、できがりのサイズの好みも人それぞれである。したがって、用いる画用紙の大きさを自由にしている。②について、例えば印刷した画像や写真を貼らないことにした。敢えて手描きに限定することで、より制作者の思いや個性が表れるように、また、絵具や色紙の活用、描き方も工夫させるようにした。

なお、先述の教科書の巻末には、地図について、分かりやすく効果的に作る方法をつかむための資料「学習のどうぐばこ 5 地図を作ろう」が掲載されている。制作にあたり学生にそれを紹介した。③について、まず(親戚を含む)家族や学校園でのことが思いつく。一方で、生活科は、地域に根ざし、児童の生活に根ざす教科である*。したがって、制作にあたり、解説の内容(3)「地域と生活」において「地域の場所やそこで生活したり働いていたりする人々」として例示されているものを学生に示した。それは次のとおりである。

自分の家や学校の周りの田や畑、商店やそこで働く人、友達の家やその家族、公園や公民館などの公共施設やそこを利用したり働いたりしている人、幼稚園・認定こども園・保育所や幼児や先生、近隣の人、子供会の人、目印にしている場所や物、遊べる川や林、自分や家の人がよく通る道など

また、ここに公共施設とあることから、解説の内容(4)「公共物や公共施設の利用」において「みんな

で使う施設等」として例示されているものも学生に提示した。それは次のとおりである。

公園、児童館、集会所、公民館、図書館、博物館、美術館、駅、バスターミナル、防災倉庫、避難場所など

このほか解説では「多くの人々が利用する河川敷や広場などを含めて幅広く捉えていくことが大切である」と補足されている。

さらに、生活科では身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動もある。したがって、解説の内容(5)「季節の変化と生活」において取り上げる「身近な自然」及び「季節や地域の行事」として例示されているものも学生に示した。それは次のとおりである。

近くの公園、川や土手、林や野原、海や山。また、そこで出会う生き物、草花、樹木などのほか、水、凍り、雨、雪、風、光など。

七夕や端午などの節句、立春や立秋などの節気、正月などの伝統行事、地域の行事など。

ところで、地域は、児童にとって生活の場であり学習の場でもある*。したがって、地域の文化的・社会的な素材や活動の場などを見出す観点からも地域の環境を繰り返し調査し、それらを教材化して最大限に生かすことが重要である*。「思い出マップ」の制作は、自分の経験を通して、その当該の地域にどのような人・もの・ことがある(あるいはあった)のか、またそれらが子どもにどのような経験を与えるのかという観点で捉えることにもつながる。その意味で、本演習は、内容(3)「地域と生活」、(4)「公共物や公共施設の利用」、(5)「季節の変化と生活」の理解を含む側面もある。

構想の段階で、「うちのまわりには田んぼ以外、何もない(あるいはなかった)」という学生もいる。しかし、その環境の中で、何かしらの思い出や子どもなりに感じていた季節感はあったかもしれない。例えば、ザリガニを捕まえたこと、夜にカエルの声が賑やかだったこと、水田を吹き抜けてくる夏の風が気持ちよかったこと、収穫後の広々とした田んぼ

で凧揚げやラジコンで遊んだこと、もし家が農家であれば、収穫作業での家族の忙しさや喜びなどである。それらを学生に想起させるようにしている。

2-2. 演習の方法

本演習の流れは、以下のとおりである。

- ①「思い出マップ」制作の課題について説明する。
- ②各自が「思い出マップ」を制作する。
- ③制作したマップを持ち寄り、それを用いて小グループで子ども時代の思い出を伝え合う。

①について、2022年6月17日（金）の第9回授業の後半において行った。先述のねらいを説明するとともに、学生が構想を練った。

②について、「思い出マップ」の制作は、授業以外の課題として学生に課しており、その提出を単位取得要件の1つとしている、必要な材料は自己負担である。なお、6月24日（金）の第10回授業は、筆者が本務校にて教育実習巡回指導の業務があったため、対面授業ではなく遠隔授業とした。それをマップの制作に取り組むための時間として充てた。

③について、7月29日（金）の第15回授業の前半で行った。課題の提示から提出（持参）まで1カ月以上の期間を設けることで、学生がゆとりをもって計画的に取り組めるようにした。自分の制作したマップを見せながら（よく見てもらいながら）じっくり伝え合うにはペアトークがよいと考え、講義室の机配置の都合等も鑑み、座席を基準に4人組（1組だけ3人組）を作って以下のように行った。

<1回目の発表>隣同士の2人組で。

- ①先の話し手が6分間話す。
- ②その後2分間、聞き手が話し手に質問したり、感想を述べたりする。
- ③話し手と聞き手を交代して、上記①及び②を繰り返す。

<2回目の発表>前後同士の2人組で。

上記の①～③を行う。

発表時間を6分間と制限しているため、発表の前に、どの思い出をどの順番で伝えるかについて考える時間を少し設けた。また、2回だけではあるが、

相手を変えて複数回伝える機会を設けることで、より相手に分かりやすい伝え方について試行できるようにした。ただし、3人組のグループ1組だけは、聞き手を2人にして、1人あたりの持ち時間を10分間（話す6分・質問や感想を4分）として行ったため、複数回伝えることはできていない。筆者は、進捗を管理しながら、活動の様子を観察して回った。

なお、当該のクラスは主に2つの教科コースに所属する学生が在籍していたため、同じコースの学生だけで固まらないように、その回では座席を筆者が指定した。

そして、本演習を評価するため、第14回と第15回の授業後の2回、学生に対してGoogle フォームを活用したアンケート調査を行った。1回目の調査では制作に関して尋ね、2回目の調査では交流も含めた演習全体に関して尋ねた。その質問項目は以下のとおりである。これは出欠確認と合わせて記名式で行ったが、回答結果を成績評価に含めないことを事前に説明している。

<制作に関して>（全て自由記述）45名回答

- ①かかった時間
- ②感想
- ③難しかった、困ったこと
- ④工夫したこと
- ⑤課題としての改善案

<交流も含めた演習全体に関して> 47名回答

- ①自分の生活が地域の様々なもの・ことと関わっており、自分の成長人々に支えられている）ことが分かる。
- ②自分のこれからの生き方について考えた。
- ③伝えたいことを選び、伝え合うことのよさや楽しさが分かるとともに、進んで交流しようとした。
- ④地図を作る技術や表現技術の向上につながった。
- ⑤生活科の内容(8)及び(9)における学習指導について参考になった。

なお、①から⑤について、5段階評価（5…とてもそう思う、4…そう思う、3…どちらともいえない、2…そう思わない、1…とてもそう思わない）を行うとともにその理由を自由記述とした。

2-3. 制作された「思い出マップ」の例
紙幅の都合により、本稿では2例のみ提示する。

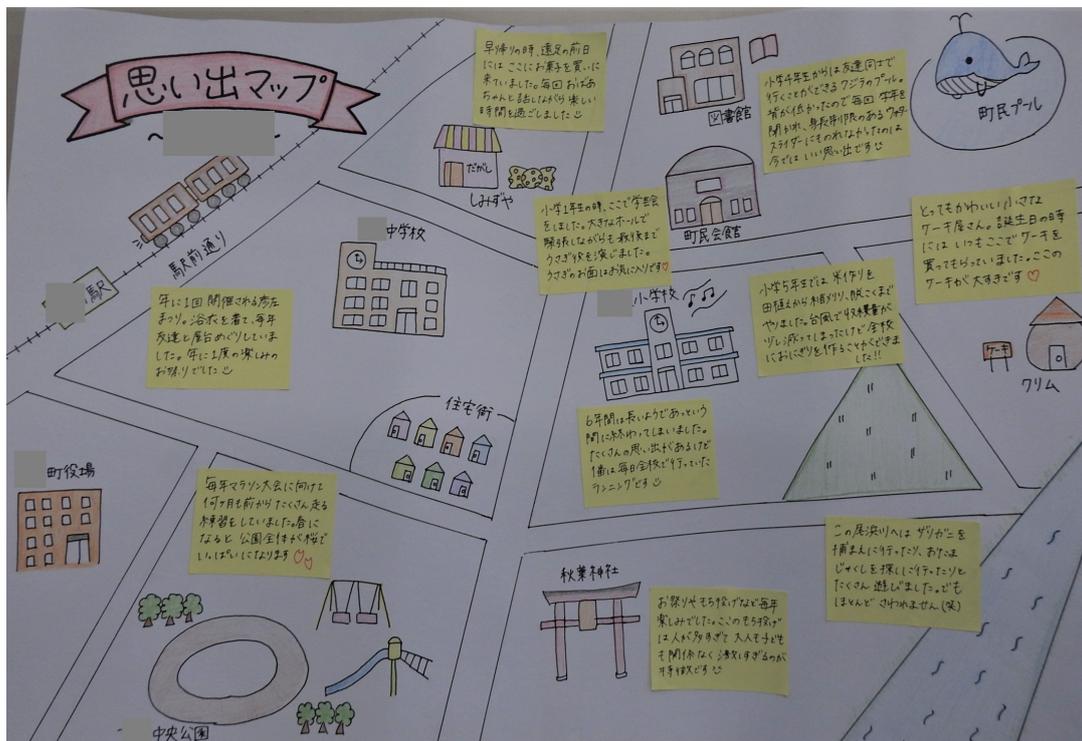


このマップは、紙をめくると記載された思い出が表れるようになっている。



このマップに記載されている思い出として、以下のものがある。(一部抜粋。顔文字は省略)

- 家の横にある用水路でザリガニ釣りを夕方までやっていた。初めて外でトイレして葉っぱを使った。(みんな経験ある…はず!!) 遅くまでザリガニとってたらお母さんにすごい怒られたのも今となればいい思い出
- 持ち投げ、相撲大会、年越し、祭り、色んな行事が開催されるよ。大きな大きな神輿と山車が神社の中に入ってくるときは鳥肌モン! 通学路でもココ通ったな。
- お祭りで太鼓を叩いた! 公民館で夜遅くまで練習したなあ~!! 毎回もらえるパックのジュースを楽しむにがんばった 本番うまく叩けて良かった



このマップに記載されている思い出として、以下のものがある。(一部抜粋。顔文字は省略)

- 年に1回開催される彦佐まつり。浴衣を着て、毎年友達と屋台めぐりをしていました。年に1度の楽しみのお祭りでした
- お祭りやもち投げなど毎年楽しみでした。このもち投げは人が多すぎて、大人も子どもも関係なく激しすぎるのが特徴です。
- 小学校5年生では、米作りを田植えから稲刈り、脱こくまでやりました。台風で収穫量が少し減ってしまっただけ、全校におにぎりを作ることができました!!
- 早帰りの時、遠足の前日にはここにお菓子を買いに来ていました。毎回おばあちゃんと話しながら楽しい時間を過ごしました。
- 小学校4年生からは友達同士で行くことができるクジラのプール。背が低かったので毎回学年を聞かれ、身長制限のあるウォータースライダーにも入れなかったのは今ではいい思い出です。

3. 実践の成果と課題

アンケートの回答をふまえ、実践の成果と課題について考察する。

<制作に関して>

①かかった時間

この回答の集計結果は、次のとおりである。

時間	人数	割合
～1時間	2人	4.4%
～2時間	18人	40.0%
～3時間	10人	22.2%
～4時間	4人	8.9%
～5時間	8人	17.8%
～6時間	3人	6.7%

集計結果より、2時間まで及び3時間までの学生を合わせると、全体の約62%に及んだ。その一方で、5時間まで及び6時間までの学生を合わせると、全体の約25%に及ぶ。このことは、学生によって制作にかける時間が大きく異なることを意味する。全体として、学生は制作に平均約3時間かかっていることが分かった。

②感想

得た回答から、「楽しい」「懐かしい」「意外に多い」に大別された。子どもの頃の思い出に浸ることで、楽しく懐かしい気持ちになっている。中には、また行って散歩してみたくなくなった、地元へ帰りたくなったという学生もいた。子どもの頃のことを意外に多く思い出せたという一方で、自分があまり覚えていない、思い出せないという学生も一部いた。

③難しかったこと、困ったこと

得た回答から、「内容をしぼること」「構図」「イラスト・配色」に大別された。まず、書きたいことがありすぎてどれを取り上げるか悩むという回答が多かった。そして、それと全体の構図・縮尺のバランス、どの道まで細かく描くかが難しかったという回答が多かった。思い出のある箇所に偏りが出ることもあったようである。さらに、手描きだったことから、建物のイラストを描いたり色を塗ったりす

るのが大変だった、中には、今は様子が変わってしまい、昔の様子を思い出して描くことが難しかったという回答もあった。

④工夫したこと

得た回答から、「構図」「イラスト・カット」「しかけ」「色使い」に大別された。先述のように、全ての思い出や道を書き載せることはできない。「構図」については、思い出をできるだけ多く載せるために、どこを(何を)中心にしてマップを作るかを考えたという回答が多かった。また、範囲をしぼった、大通りだけを描いた、文を短めにした、実際の位置から少し場所を変更したという回答もあった。そのほか、通学路の道順に沿いながら五感で感じていたことを取り上げるといった、自分でテーマ設定しているという回答もあった。そのようにして、ごちゃごちゃでもスカスカでもなく、様々な場所や事柄を1枚に収めるように工夫している。

「イラスト・カット」については、その思い出に関する小物も描き加えたり、色紙で別に作って貼ったりするなどして思い出の深さをより印象づけるといった回答があった。また、童心に戻って子どもっぽい感じの絵柄にしたり、その思い出を誇張する絵柄にしたりしたという回答もあった。さらに、建物名をロゴで入れる、地図記号を用いる、余白をなくすようにカットを描きこむなどの工夫をしたという回答もあった。

「色使い」については、見た目を単にカラフルにするというだけではなく、文字が見やすいように吹き出しや背景の色遣いを考えたり、思い出の種類で吹き出しの色を分けたりしたという回答があった。また、水田や山林に対しても様々な緑色を使ったり、その地域のイメージに合わせた背景色にしたりするなどの工夫をしたという回答があった。

「しかけ」については、紙をめくって思い出を読めるようにしたという回答が多かった。そのしかけによって、めくる楽しみがあるほか、スペースを効率よく思い出を多く載せることができることである。

以上の③難しかったことや困ったこと、④工夫したことについて、今後の実践の際に、参考意見として学生にも予め伝えていきたい。

⑤改善点

この設問には、「載せる思い出の数を指定する」「写真を使ってもよいことにする」「思い出は別に書いて、マップに立てるようにする」という3つの回答があった。1つ目の「数の指定」については、内容や構図と合わせてやはり自分で判断してほしいところである。2つ目の「写真の使用」については、絵を描くことに苦手意識をもつ学生にとっては、確かに取り組みやすくなる面もある。手描きの意図を伝えつつも、学生が選べるようにできることを今後考慮したい。3つ目について、数ある思い出を1枚のマップに描きこむことがそもそも難しいのかもしれない。思い出を描くあまり、道路が隠れてしまう、そもそも道を細かく描けないという回答もあった。思い出を別に書いて立てるという方法は、その問題の解決に有効である。1つ目の「数の指定」も、思い出を書ききれない、しぼる難しさからの意見であった。つまり、思い出を別に書いて立てる方法にすれば、むしろ数に制限なく表すことが可能となる。2つ目の意見と同じように、今後、選択肢として採り入れたい。

<交流も含めた演習全体に関して>

- ①自分の生活が地域の様々な人・もの・ことと関わっており、自分の成長が人々に支えられていることが分かる。
この回答の集計結果は、次のとおりである。

回答	人数	割合
5…とてもそう思う	33人	70.2%
4…そう思う	13人	27.7%
3…どちらともいえない	1人	2.1%
2…そう思わない	0人	0%
1…とてもそう思わない	0人	0%

集計結果より、肯定的回答が大多数であった。その理由として、「それぞれの思い出が今の自分を作っている」「書き出してみても改めて、地域の人たちとのつながりを実感した」「マップを説明する時に、たくさんの人たちのことを話した」という回答があった。

- ②自分のこれからの生き方について考えた。
この回答の集計結果は、次のとおりである。

回答	人数	割合
5…とてもそう思う	16人	34.0%
4…そう思う	22人	46.8%
3…どちらともいえない	6人	12.8%
2…そう思わない	2人	4.3%
1…とてもそう思わない	1人	2.1%

集計結果より、肯定的回答が80.8%が多かった。その理由として、「地元で感謝してこれからも大切にしようと思った」「もっと人と関わって生きていきたい」「私も地域の役に立てるといい」「自分が大人になった時も、子どもに優しくありたい」などの回答があった。

しかし一方で、「どちらともいえない」を含めた否定的回答の割合は19.2%に及ぶ。これは①・②の回答よりも多い。その理由として、「過去の振り返りはしたが、これからの生き方は考えなかった」という回答があった。それについて、本実践ではできていなかったが、個人差はあるにせよ、本演習において以下の2点の手立てをとることが考えられる。第1点は、「感謝」という視点から「思い出」を捉えることである。また、それをふまえて、自分のこれからの生き方についての考えを伝え合うことが第2点である。

- ③伝え合うことのよさや楽しさが分かるとともに、進んで交流しようとした。
この回答の集計結果は、次のとおりである。

回答	人数	割合
5…とてもそう思う	40人	88.9%
4…そう思う	5人	11.1%
3…どちらともいえない	0人	0%
2…そう思わない	0人	0%
1…とてもそう思わない	0人	0%

集計結果より、全て肯定的回答であった。「人の地元トークがおもしろかった」「面白いと言ってもらえてうれしかった」「みんな生き生きと思い出に

ついて話していた」「一人ひとりの人生が思い出にあふれている」「繰り返し発表することで話し方の向上にもなった」「表現の仕方がみんな違って、見るのも聞くのも楽しかったので、もっと時間をかけてゆっくり一人一人の作品を見たいと思いました」「普段話すことのない人とも話せて楽しかった」という回答があった。人には本来、誰かに伝えたい欲求があり、話を聞いてもらえたり、分かってもらえたりと、やはりうれしい気持ちになる。

④地図を作る技術や表現技術の向上につながった。
この回答の集計結果は、次のとおりである。

回答	人数	割合
5…とてもそう思う	28人	59.6%
4…そう思う	15人	31.9%
3…どちらともいえない	3人	6.4%
2…そう思わない	1人	2.1%
1…とてもそう思わない	0人	0%

集計結果より、肯定的結果が大多数であった。その理由として、「どう表現すれば見る相手に伝わるかを考えた」「みんなのも見てたくさんの描き方やデザインの仕方を学んだ」「人に伝えて言葉にできた」という回答があった。

⑤生活科の内容(8)及び(9)における学習指導について参考になった。
この回答の集計結果は、次のとおりである。

回答	人数	割合
5…とてもそう思う	23人	48.9%
4…そう思う	23人	48.9%
3…どちらともいえない	0人	0%
2…そう思わない	1人	2.1%
1…とてもそう思わない	0人	0%

集計結果より、肯定的回答が大多数であった。その理由として、「誰一人として全て一致する思い出なんてなく、かけがえのない個としての存在を実感した」「自分の体験を大切にすることの良さがわかった」「思い出などを引き出せるよう準備すべきだ

とわかった」「人との交流や触れ合いが大切で、そこから自分への気づきになることがわかった」「相手意識や目的意識が大切であるということが、発表を通してわかった」「交流の仕方や、授業に活かす方法を知ることができた」という回答があった。

そのほか、「将来、教師になった時に大切にしたいことがあった」という回答もあった。生活科の学習指導では、互いのよさやそれぞれの気づきを共鳴させることが大切である*。だからこそ、学級全体の中に、多様性を尊重する風土を醸成し、互いが異なることを認めあえる雰囲気づくりをしていくことが大切である*。生活科の学習指導に限ったことではないが、子どもと積極的に会話する教師になってほしい。

4. おわりに

アンケート調査の結果から、本演習での具体的な体験を通して、先述した3つのねらいは達成されている。しかし、見出された課題もあったことから、今後改善しながらさらに実践を積み重ねたい。

また、本稿では主に実践の紹介に止まっており、制作された「思い出マップ」に、全体としてどのような思い出が記載されているか、なぜその思い出を載せたのか、伝え合いの活動でどのようなやりとりがなされているかといったことについて追求できていない。より詳細な分析が求められる。

さらに、以下の2点についての検討も今後の課題として残されている。すなわち第1点は、本演習により、学生が内容(8)及び(9)に関する具体的な学習活動をどのように理解したかについてである。本実践では、第15回の授業において、本演習の交流の後、筆者が教科書に提示されている「自分ほっけん」の学習単位について解説した。そして第2点は、本演習により、授業目標である生活科の授業作りへの関心・意欲がどのように涵養されたかについてである。

これらの課題について、また稿を改めて実践研究に取り組みたい。ご叱正、ご助言を賜ることができれば幸いである。

注. 本文中の*について、解説からの引用である。